

テサロニケ第一4章13-18節「神の家族の再会」

1A 私たちの「てんでんこ」

2A 眠った人々 13-15

1B 他の望みのない人々 13

2B イエスの復活にある希望 14

3B 生き残っている私たち 15

3A 主の来臨 16-18

1B 主の呼びかけ 16

2B 生き残っている者たちの引き上げ 17

3B 慰め 18

本文

私たちが神の家族、教会としての家族を見ていくに当たって、その行き着くところを考えていきたいと思います。私たちは、どこに向かって霊の家族として生活しているのか？キリストによって互いに結ばれた私たちは、肉体の死というものによって行き別れになります。しかし、私たちは知っています。肉体の死は、永遠の別れでは全くないことです。むしろ一時の別れであり、寂しいですが決して悲しみに沈むようなことではありません。肉の家族においては、墓参りなどの先祖供養によってそのつながりを持つとしますが、私たちはそうではありません。あるキリスト教の墓地が、千葉県にあります。その入り口には「復活の希望」と大きく書かれています。そのお墓参りに行く時は、そこからキリストにある死者たちが甦ることを、強く信じているのです。

教会家族がどこから始まったかについて、初めに使徒の働き 2 章を見ましたが、終わりに教会家族がどのように終わるのか、いや、決して終わらない家族なのだよということを見ていきたいと思えます。テサロニケ第一 4 章を開いてください。13 節から 18 節までをお読みください。

1A 私たちの「てんでんこ」

テサロニケにある教会の人々には、一つの特徴がありました。それは、主イエス・キリストが間もなく戻って来られるという強い希望を抱いていたということです。彼らはその希望を持っているので、聖霊によって喜びを持っており、愛による労苦もあり、その噂はその地域一帯に広まっていました。しかも彼らは、それほど信仰歴が長いわけではありません。いや、とても新しい信者でした。それにもかかわらず、聖霊に満たされ、信仰を働かせて、愛の労苦によって知られていたのです。

けれども、彼らには一つの問題がありました。それは、既に主にあって死んでいった人々が出て来ていたことです。彼らと行き別れになってしまったことで悲しみ、また先に死んでいった人々が、

主イエスが天から戻って来られる栄光に預かることができないではないか、という悲しみがあつたからです。裏返すと、それだけ彼らは自分たちが生きている時に主が戻って来られると信じていたのですが、そこでパウロは彼らに、正しい知識を与え、慰め、励ました。主が戻って来られる時に、彼ら自身が甦る。それでその来臨の恵みに預かることができるのだよ、そしてあなたがたも引き上げられるから、主に会えるだけでなく、彼らとも再会できるのだよと慰めたのです。

ところで、日本における宣教の課題は、家族の救いです。福音を信じて救われなさいというメッセージを語れば、次のような心の抵抗を多くの方が抱きます。「もし、私だけが救われて、他の家族が救われなかったらどうするのか？私は天国に永遠にいて、彼らは地獄に永遠にいて、永遠に別れて暮らすことになるのか？そんなこと考えられない！」という葛藤です。それで、もし他の家族が地獄に行くのであれば、自分も地獄に行っても構わないとさえ思う人たちもいます。

そのような時に、そのような日本の中にも私たちキリスト者が持っている家族意識と似たような知恵があります。それは、「津波てんでんこ」というものです。岩手県の三陸地方において、昔からの言い伝えです。「てんでんこ」というのは、「めいめいに」「各自」という意味です。そこは、「津波が来たら、取り物もとりあえず、肉親も構わずに、各自てんでんばらばらに一人で高台に逃げろ」あるいは「自分の命は自分で守れ」という意味になります。これは、決して自己中心的な考えではなく、むしろ家族のことを本当に思っている知恵であります。地震が起こって津波が来るまでに、家族を助けに行こうとすれば、確実に津波に襲われます。そうすれば、自分が救われただけでなく、家族も救うことが出来ません。しかし、もし自分たちが前もって、「津波の時はてんでんこをしよう」と約束していれば、その信頼関係の中で、自分が高台に逃げる時も、愛する家族の人たちも同じ世に高台に逃げているだろうと信じることができるからです。そして事実、2011年の東日本大震災において、釜石の小中学生の生存率は99.8%という驚異的なものでした。そして家族の多くも高台に上って、助かりました。

そうなんです、彼らはそれぞれ、自分自身が救われることを考えました。自分の命に対して自分が責任ある行動を取りました。そして愛する家族も同じように、それぞれが自分の命に責任を取ってくれると信頼したのです。これこそが、真実な家族の結びつきです。私たちキリスト者は、まさにキリストにあつてそのような信頼関係を持っています。そして私たちが救われるのは、滅びゆくこの世から救われるのであり、私たちが救われる高台は、まさに主ご自身のおられる天であります。私たちはそれぞれ、一時、生き別れがあります。けれども、必ず天から戻って来られるキリストにあつて、再開する望みがあるのです。

2A 眠った人々 13-15

1B 他の望みのない人々 13

13 眠った人々のことについては、兄弟たち、あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。

あなたがたが他の望みのない人々のように悲しみに沈むことのないためです。

「眠った人々」についてパウロは書いています。これは、イエスさまを信じて死んでいった人々のことです。ヨハネ 11 章の、ラザロの話思い出してください。マルタがラザロを直してくださるようにイエスに頼んでから、イエスはなおご自分のところに二日間、とどまられました。そして、弟子たちには、「わたしたちの友ラザロは眠っています。」と言われました。弟子たちは、「眠っているのなら、彼は助かるでしょう。」と言いましたが、イエスは、「ラザロは死んだのです。」とはっきりと答えられています。そしてラザロは生き返るのですが、「眠っている」というのは死んでいる状態が永続するのではない、やがてよみがえる時がある、という意味で使われている言葉なのです。決して、意識がなくなることはありません。ピリピ書 1 章 23 節には、「私の願いは、世を去ってキリストとともにいることなのです。」とありますが、世を去ることはつまりキリストとともにいることであり、死んだらすぐ主のご臨在の中にはいり、意識があるのです。眠っているというのは、クリスチャンにとって死は終わりではない、必ずよみがえる時があることを示す、希望のことばなのです。

次に、「あなたがたに知らないでいてもらいたくありません」とパウロは言っています。言い換えると「無知でいてほしくない」ということです。パウロが、「知らないでいてもらいたくない」あるいは、「ぜひ知っていてほしい」と言っているところは、他にも手紙の中にあります。ローマ 11 章において、異邦人の救いの完成の後に、イスラエルが皆救われることについて、「知っていただきたい」と言っています。コリント第一 12 章では、御霊の賜物について、ぜひ知っていただきたいと言っています。コリント第二 1 章 8 節では、キリスト者が受ける苦しみや試練について、ぜひ知っておいてください、と言っています。そしてここ、主が再び来られることについて知らないでいてもらいたくないと言っています。皮肉なことに、これらの話題、すなわちイスラエルの救い、御霊の賜物、キリスト者の苦しみ、そして携挙や再臨について、キリスト教会はその話題を遠ざける傾向があります。しかし、私たちは真っ直ぐに、これらの話題に取り組むように使徒たちに命じられているのです。

そして「あなたがたが他の望みのない人々のように」とあります。先ほど話しましたように、テサロニケの人たちは、主イエスが間もなく来られることを待ち望んでいました。けれども、その前に死んでしまった人たちが、再臨の栄光にあずかることができなくなってしまった、と思って、泣き悲しんでいたのです。あたかも、すべての望みはなくなってしまったかのように悲しみに沈んでいました。しかし、私たちはそのような望みのない人々になる必要はありません。

2B イエスの復活にある希望 14

14 私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあって眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずで

イエスが復活されたのだから、イエスにあって死んだ人々も復活するのだということです。復活す

るから、イエス様が地上に再臨する時に共にそこに従っていく聖徒たちの集まりの中にいるのだということです。主が到来する時に、聖書では、聖徒たちもともに来るとの約束があります。「ゼカリヤ 14:5 私の神、主が来られる。すべての聖徒たちも主とともに来る。」「ユダ 14 見よ。主は千万の聖徒を引き連れて来られる。」そして黙示録 19 章で、「19:14 天にある軍勢はまっ白な、きよい麻布を着て、白い馬に乗って彼につき従った。」とあります。もし復活していなければ、付き従うことなどできません。

イエス様は、ラザロを直されなかったことをなじるマルタに、こう言われました。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。(ヨハネ 11:25)」イエスがよみがえられたのだから、イエスのうちにいる者たちも必ずよみがえります。それがコリント第一 15 章全体に書かれていることです。20-21 節だけを読みます、「しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。というのは、死がひとりの人を通して来たように、死者の復活もひとりの人を通して来たからです。」これが、人間が生と死の中で生きなければいけない不条理に対する、究極の慰めです。ラザロの話に戻りますと、イエスがラザロの死のことで泣いているマリヤを見て、泣き、また激しく憤られました。それは、死というものが、どれほど人間にひどい悲しみをもたらすものであるかを、主ご自身が感じておられたからです。

3B 生き残っている私たち 15

15 私たちは主のみことばのとおりに言いますが、主が再び来られるときまで生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません。

パウロはここで、はっきりと「主のみことばのとおり」と言って、これが主からのものであることを話しています。旧約聖書の箇所ではそれほど明確に啓示されていなかったけれども、今、使徒たちに明らかにされていることです。パウロは、それをコリント第一 15 章で「奥義」と呼んでいます。「15:51-52 聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。終わりのラツパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラツパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。」死者がよみがえることについては、昔から預言者たちによって預言されていました。しかし、生き残っている者たちが死ぬことなく、朽ちない体、復活と同じ体に変えられるということについては、旧約時代には明瞭にされていなかったことです。ここでパウロが、「主のみことばのとおり」と言っているのですから、これをあやふやにしたり、比喩や象徴であるとするのは間違っています。そのまま受け入れるに値します。

パウロは、「主が再び来られるときまで生き残っている私たち」と言っています。彼らと言わないで、私たちと言っています。つまり、イエス様が自分たちが生きている時代に戻って来られると信じていたのです。これはパウロだけでなく、ペテロもヨハネも、ユダも、ヤコブも、それぞれの手紙の中で一致しています。キリスト者は、どの時代に生きていても、自分たちの時代に主が戻って来ら

れるという期待と希望を持つべきであるということが、ここから分かります。

そして、「死んでいる人々に優先するようなことは決してありません」と言っています。これが、テサロニケの人たちが悲しんでいる理由でした。自分たちは主の来臨にあずかることができるけれども、死んだ人はあずかれないのだと思ってしまっていたからです。

3A 主の来臨 16-18

1B 主の呼びかけ 16

16a 主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラツパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。

主は、「ご自身」が天から下って来られます。ここの「ご自身」のギリシヤ語はとても強く、「イエスご自身が戻られるのであり、他のだれでもない。」という意味があります。そうです、私たちをお迎えに来るのは、御使いでもだれでもなく、私たちの愛する主ご自身であります。私たちに個人的に会いたいと願っておられるのです。その思いはイエス様の弟子たちの言葉にありました。「ヨハネ 14:2-3 わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言うておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。」

そして、主が来られるとき「号令と、御使いのかしらの声と、神のラツパの響きのうちに」来られます。「号令」とは、命令のことです。何かを行なわせる時に声をかけることです。イエス様がこう言われました。「ヨハネ 5:28 墓の中にいる者がみな、子の声を聞いて出て来る時がきます。」ラザロに対して、ラザロよ出て来なさいと大声で言われたのと同じような号令です。そして、「御使いのかしらの声」とありますが、付いて行く天使長がいます。ミカエルが天使長としてユダ 9 節に出て来ます。主の号令と共に、天使長が声掛けをします。そして、「神のラツパ」とは、神ご自身が聖徒たちを招集しておられる音です。ラツパは基本的に、遠くにいる民を呼び集める時に鳴らします。民数記 10 章にて、全会衆が会見の天幕に召集させる時にラツパを鳴らします。荒野の旅において、出発する時も鳴らしますし、戦う時も鳴らします。祭りの時にも鳴らします。つまり、ここでは神ご自身が、遠くにいる聖徒たちみなを、御子キリストのところに召集するようにラツパを鳴らすのです。

2B 生き残っている者たちの引き上げ 17

16b それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、17 次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。

先に「私たちは優先することはない」と言いましたが、ここでその理由が書かれています。「キリストにある死者が、まず初めによみがえ」るからです。死者の復活は、キリストが来られる時にもたらされます。私たちが抱いている大いなる希望、死の復活は、携挙のときに起こります。そして、「生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに」とあります。たちまちというのは、コリント第一 15 章にありますね、瞬きをするぐらいの時間です。

そして、教会家族のテーマとしては、「いっしょに」という言葉に注目したいと思います。これは、主とお会いするのは、同時間で同じ場所において、ということでもあります。教会の聖徒たちがみな、いっしょに会う出来事でもあるのです。これは、史上最大の同窓会、再会の時になるのです。使徒たちやその時代のキリスト者から始まり、初代教会、そして教会史において生きていた人々、そして世界にいるキリスト者、そしてもちろん、自分たちの愛する地域教会の兄弟姉妹、全ての人が一堂に会するのが、この携挙における出来事なのです。

私たちは、教会として一つに集められます。そしてその後には大患難が下ります。しかし、携挙の後にも主の名を信じて救われる、患難期における聖徒もいます。彼らは殉教しますね。これらの聖徒たちは、キリストが地上に再臨される時に同じようにして御国においてキリストと共に千年間、統べ治めます。「黙示 20:4 また私は、多くの座を見た。彼らはその上にすわった。そしてさばきを行なう権威が彼らに与えられた。また私は、イエスのあかしと神のことばとのゆえに首をはねられた人たちのたましいと、獣やその像を拝まず、その額や手に獣の刻印を押されなかった人たちを見た。彼らは生き返って、キリストとともに、千年の間王となった。」そして、千年期が終われば最後の審判があり、その後、新天新地が来ます。そこには天のエルサレムが降りてきます。そしてその神の都には、十二の門があり、イスラエルの十二部族の名が掻き記されています。土台には、十二の宝石があり十二使徒の名が記されています。つまり、イスラエルが完成し、また教会が完成し、一つの神の都の中にいるのです。神の救いのご計画の中で、その中で生かされていた者たちは、最後は神とキリストの中で一つにされるのです。これこそが、神の家族の究極の姿です。それをヘブル書の著者は、雄弁に語りました。「12:22-24 しかし、あなたがたは、シオンの山、生ける神の都、天にあるエルサレム、無数の御使いたちの大祝会に近づいているのです。また、天に登録されている長子たちの教会、万民の審判者である神、全うされた義人たちの霊、さらに、新しい契約の仲介者イエス、それに、アベルの血よりもすぐれたことを語る注ぎかけの血に近づいています。」

そして、「雲の中に」とあります。この雲は空の雲ではなく、神の栄光の雲です。幕屋において栄光の雲が満ち、神殿においてもそうでした。シナイ山において、黒い雲が降りてきました。それは神の栄光の雲です。イスラエル人はその時、恐ろしくなりました、なぜならその聖なる御姿を見たからです。私たちも同じように、聖なる主の栄光をにあずかります。「1テサロニケ 5:23-24 平和の神ご自身が、あなたがたを全く聖なるものとしてくださいますように。主イエス・キリストの来臨のと

き、責められるところのないように、あなたがたの霊、たましい、からだを完全に守られますように。あなたがたを召された方は真実ですから、きっとそのことをしてください。」

そして、「一挙に引き上げられ」とあります。ギリシヤ語で「ハルパゾー」という言葉で、「力づくで引き抜く」という意味があります。これと同じギリシヤ語が、使徒行伝23章10節で使われています。パウロがエルサレムで、ユダヤ人たちに殺されそうになったとき、ローマの千人隊長がパウロを引き出して牢屋に入れました。そして、ユダヤ人たちの議会の前にパウロが立ちました。パウロは、「私はパリサイ人であり、死者の復活の望みのことで、さばきを受けているのです。」と言いました。するとパリサイ人とサドカイ人との間に激しい論争が起こり、その論争ともつれ合いのなかで、パウロの体が引き裂けそうにさえなりました。そこで千人隊長が、「パウロを彼らの中から力づくで引き出し」とあります。ここのギリシヤ語が、ハルパゾーなのです。私たちは、この地上から力づくで引き出されます。

そして「空中」とあります。聖書には、天は三つの種類が書かれていますが、パウロが一度、引き上げられたところの「第三の天」または「パラダイス」があります。これは、主が御座に着かれていますところの天です。そして、私たちがいつも目にしている大空があり、これも天です。そしてもう一つ、「空中」と書かれている天があります。ここには、あの悪魔や悪霊どももいるところで、第三の天でもなく、地上の天でもありません。その中間地帯であります。この第三の天から、空中にまで主が下って来られるのです。

そして、私たちが引き上げられる目的は何ですか？「主と会う」ことです。パウロは、あの有名な愛の章で、こう言いましたね。「今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、その時には顔と顔を合わせて見ることになります。今、私たちは一部分しか知りませんが、その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになります。(1コリント 13:12)」という言葉が、実現します。そして「このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。」と言っています。私たちは主とお会いするだけではなく、そのときからずっと主とともにいることになります。主の愛のふところの中でずっと、憩うことができるのです。そして、主とともにいるだけではなく、先に死んでしまった人たちもいっしょに引き上げられたのですから、彼らともずっといっしょにいます。

3B 慰め 18

18 こういうわけですから、このことばをもって互いに慰め合いなさい。

このことばをもって慰め合うことができます。ここで、もう一度思い出してください。パウロはこの出来事を、「主のみことばどおりに言いますが」と言っています。主ご自身がパウロにお語りになったことばです。このような、あまりにもすばらしくて、信じられないような出来事を、注意深く、これは

真実なことばであることを伝えているのです。これは、絶対的なものであり信頼に値するのです。絶対的なものであることを信じるからこそ、神のみことばが私たちのうちに働きます。そして、これは、苦しみの中にあっても喜び、愛を持ち、信仰の働きの中に生きていく力を与えます。